# 目次

大広間にて　2
小さな世界で　34
目覚めと共に　72
誓いのキスをお返しに　83
手取り足取り手ほどきを　105
夜の帳の片隅で　130

# 大広間にて

小さな劇場ほどもあろう絢爛豪華な大広間。格調高い調度品で彩られたそこに金切り声が響き渡った。口を閉じることさえ忘れてわなわなと震える中年の淑女。唖然呆然とした恰幅の良い紳士。一際贅を凝らしたドレスを身に纏いながらも、端正なその顔を醜く歪めた若い少女。年老いた使用人に警備とおぼしき厳つい男たちまで、広間に集った者の視線は一つ残らず"それ"に釘付けだった。宙に浮かんだ水面のような、鏡のような何か。理屈も原理も分からないが、そこにはどんな写実画でも到底及ばない鮮明な光景が浮かび上がっている。得体の知れないその中で一人の女性が顔をしかめた。

「あらあら、品が無いわねぇ。領主の奥方様だっていうのに」

先程悲鳴を上げた中年女性を真紅の眼で冷たく睨む。鋭い目つきと整った容姿は美しさを通り越し、恐怖すら覚えかねないほどだった。

「ともかく、遠見の魔術越しで失礼するわ。私はカトリーナ・アルストロメア。あなたたちの言葉で言うなら……そうねぇ。サキュバス、淫魔といったところかしら？」

一点の曇り無き白い肌、月明かりをそのまま写し取ったかのような金色に輝くストレートヘア。尖った耳に額から生えた二本の角。むせ返るほどの色香を放つ美貌は明らかにヒトのそれでは無い。

そして、そんな異形の証を見咎めるまでもなく彼女の体躯は人間離れしている。ヒップは片側のみでも優にメロンを上回る大きさ。たわわに実るあまり、ほどよく肉が乗った柔らかそうなウエストが細く引き締まって見えるほど。胸の膨らみ

は控えめだが形も丸みも完璧そのもの。性的魅力に満ちた肉体がサキュバスという名乗りを十分に裏付けている。

つやめく漆黒の衣装はレオタードの胸元にスリットを入れ、所々に刺繍を施した艶めかしいものだった。肩口や腋を煽情的に見せつけ、美しい胸のラインや豊満な尻肉を惜しげもなく披露するエロティックな装い。恵まれた肉付きが生み出す曲線美はめまいがするほどに妖艶だが、その背中には蝙蝠さながらの禍々しい翼が見てとれる。存分に両翼を広げれば軽やかに夜空を飛び回れることだろう。

だが。今この瞬間、広間の注目を一身に浴びているのは彼女ではなかった。言葉を失い愕然とし、あるいは虫けらでも見るかのように頬をわななかせて人々が視線を注ぐ先は見目麗しい淫魔ではなかった。

ふっくらと実った太ももに抱き着き、上気した頬を擦り寄せる。うっとりと瞼を閉じて彼女の足元に座り込み、おねえさん、おねえさんと呼び縋る。一糸纏わぬ姿を人目に晒して淫らな魔物に媚びへつらい、しなを作って幼い身体の全てを委ねている栗毛の少年。強烈な視線をその身に集めながら、彼はそれに気付いてもいないようだった。小指ほどの小さな男性器を見るも惨めにぶらつかせ、華奢な肢体も品の良い顔立ちも恍惚と酔い痴れ見る影もない。

広間の人間が浮かべる様々な表情をひとしきり眺めると、サキュバスは頬を吊り上げせせら笑った。

「見ての通り、この子は私が頂いたわ。あなた達なんかには勿体無いもの」

嘲りをこれでもかと含んだ声色が凍りついた空気にヒビを入れた。最初に口火を切ったのはあご髭を蓄えた身なりの良い男性だった。

「馬鹿な、馬鹿な馬鹿なっ！　起きんか、目を覚まさんか！」
窓が割れんばかりの怒号。が、少年は柔らかな足に甘えるばかりで振り向く気配すら感じられない。男の額に青筋が浮かぶ。
「家を継ぐんだ、お前はっ！　この土地を治める人間なんだぞ！　それを化け物なんぞに……正気に戻れっ！」
泡を飛ばして怒鳴り散らすも周囲がざわめく以上のことは起こらない。強いて言うなら化け物呼ばわりされた当人が乾いた溜息をついただけ。それとて少年がおねえさん、と呼びかけた途端に笑顔に飲まれて消え失せてしまうほどの至極些細な反応だった。男は顔を赤黒く染め上げ、ぎりぎりと歯軋りするばかり。
「坊ちゃま、坊ちゃま！　ご無事ですか、お怪我はありませんかっ！」

次に声を上げたのは腰の曲がった老婆だった。切羽詰まった眼差しで食い入るようにただただ少年を見つめている。直前まで固く組まれていた皺だらけの両手には白い痕が残っていた。

「勿論よ、かすり傷の一つだってあるものですか。安心して頂戴、お婆ちゃん」

少年のあご下を軽く掻き上げてやりながら魔物は堂々と頷いて見せる。はっきりとした声色と優しい手付きに老婆は辛うじて息を吐き出した。が、愛玩動物のようにあやされ愛でられ、とろけきった声を漏らす一人息子を目の当たりにして皆が安堵出来るはずもない。

「嘘、嘘よ……いい子じゃない、いつもいい子だったじゃない！　そんな、戻って！　ちゃんとしてぇっ！」

耳をつんざくヒステリックな悲鳴。ようやく聞き取れる言葉を発したものの、中年の女性は明らかに血の気を失いつつあった。叫び散らした領主の妻、つまりは少年の母親をほんの一瞬睨みつけ、夜の悪魔は淫靡に嗤う。

「あらそう、それなら見せてあげましょうか。生まれ変わったこの子の姿を……ね」

カトリーナ、ひとまずはリーナと呼ぼうか。ともかく、彼女達が睦み合っているのは一見するとゆとりのある寝室のようだった。右の壁際には質素ではあるがやや大きめの真新しいベッドが置かれ、それでもなお広い床に絨毯が敷き詰められている。程よい明るさと清潔感も相まって安心感を覚えそうだ。

だが、大広間の人間達からしてみればおぞましいと言う他無い。何処であるかも分からぬ光景を不気味な魔術で見せつけられてただただ指を咥えるばかり。その上リーナ達の背後の壁には黒光りする首輪に口枷、結われたばかりの荒縄、新品らしき鞭、挙句の果てに男性器を模した性玩具などがずらりと並んでいるのだから。

「は〜い、ごろんちょしましょ」

とはいえ、渦中の二人は過呼吸を起こしそうな観客などどこ吹く風。薔薇のような瞳に囚われの彦君ただ一人を映し、赤子にするように語り掛ける。言われるがままに寝そべった少年も片時とて他所を見ようとしない。仰向けに転がりお姉さんだけをじっと見上げ、陰毛の見当たらない股間を切なげにくねらせる。餌をねだる雛鳥のように小さな口を精一杯開き、舌まで伸ばして慈悲を乞う。そのま

ま呼びかけるものだからあねえひゃん、おねえふぁんと言葉がぼやけて意味を成さない。

無防備を極めた瑞々しい獲物を舐めるように見つめ見下ろし、リーナはぶるりと肩を震わせた。贅肉の見当たらない脇腹、未発達な腹筋、まだ薄い胸板、膨らみのない喉。最後に差し出された舌先へと順に視線を巡らせる。ひくひくと悶えるか弱い舌をじっと眺めて焦らしたて、なおもじれったく口を開く。酷く緩慢にハリのある唇が形を変えた。

奥からぬるりと現れたのは指ほどもあろう長い舌。オスを嫐(なぶ)るための真っ赤な舌先から透明な粘液が垂れ下がる。ゆっくりと滑り垂れ落ち糸を引く。伸びるにつれて細くなっていくそれはやがてぷつりと途切れ、彼女の足元へと滴り落ちた。

床で健気に待ち焦がれ、青い両目をきらきらと輝かせ、必死に乞うていた少年の口へと滴り落ちていった。

たった一筋、小さじにも満たない僅かばかりの潤い。けれどいたいけな雛は幾度も幾度もそれを咀嚼し、舌の上で転がし回し、小さな胸をありありと高鳴らす。頬が落ちそうな顔をしながら喉を鳴らして飲み込むまで、淫乱な親鳥は瞬きすら挟むことなく稚児の痴態をその目に焼き付けていた。

「嬉しそうにしちゃって。かわいいんだから」

頬を火照らす甘い囁き。しかし、それはあくまで少年にとっての話でしかない。

「……けないで」

静まり返った大広間に殺気立った声が響いた。

「ふざけないでっ！　一体何、あの犬畜生は！　あんな輩をこのわたくしに……？　冗談じゃないわ！」

少年と同じ年の頃だろうか。煌びやかなドレスを着込んだ少女は眉をつり上げ憎々しげにまくし立てる。が、彼女の矛先は見せつけられる醜態ではなく少年の父親へと向かっていた。

「愚図だろうが軟弱だろうが、血筋だけは確かだからと！　このわたくしが我慢してやっていたのに！　だっていうのに！」

半狂乱の少女と必死に宥める従者たち。更なる混乱を呈した観客にサキュバスは冷ややかな視線を差し向ける。

「この子の魅力も分からないなんて……可哀想に。節穴なんてものじゃないわね」

氷柱を思わせる鋭く冷たい声色に反し、しゃがみ込んで少年を撫でやる手つきは陽だまりのように丸く穏やか。目元を拭って頬を包み、目と目を合わせて囁きかける。

「もっと可愛いところ、素敵なトコロ、見せてあげましょう？　どう、できそう？」

少年の顔がぱっと華やぐ。間髪を入れずに頷くと軽やかにその身を跳ね上げた。

「おねえさん、おねえさぁん……」

足元に侍って一途に見上げ、切なく呼びかけ媚を売る。身体の全てを余さず使って甘え擦り寄り見せつける。ぴちぴちと尻尾を振り、ぷらぷらと揺らして見せつける。観衆が数人崩れ落ち、騒音と共に絶叫が轟く。

迷いすら見せずに取った姿勢。それは生まれたままの姿での四つん這いだった。しなやかな手足を精一杯に突っ張り、少しでもお姉さんの近くにあろうといじらしく首を伸ばしてみせる。犬さながらの恰好、と言うには太ももがやや過剰に開き過ぎていた。毛穴すら見当たらない小振りな尻は何物にも覆われず、その谷間から薄肌色の幼い窄まりがはっきりと見てとれる始末。若い蕾とでも形容するべき肛門のすぐ傍には葡萄のような睾丸が慎ましやかに実っている。垂れ下がった性器は子供のそれと言えども短小この上なく、それこそ小指ほどの長さしかない。亀頭があるはずの先端は色つやの良い包皮で完全に覆われ、その先ではいくらか余った皮が蛇腹のようなシワを形作っていた。ただでさえ粗末で情けないというのに少年がひっきりなしに腰を揺すって尻を振りたくるものだから、自然と性器も右へ左へぴこぴこぴちぴち振り乱される。盛りのついたケダモノか、あるいは

主に媚びて千切れんばかりに尻尾を振る飼い犬か。どちらにしても理性ある人間に出来る行為では無い。

そしてだ。少年だったオス犬が主を見上げている以上、下半身の醜態は当然観客に向かい合う。宙に浮かぶ魔術の中で盛大に写し出された跡取り息子の屈服媚び媚び無様チン振り。大広間が凍てつくのは当たり前のことだろう。

「おねえさん、おねえさぁん……♡」

そんな空気になぞ目もくれず、意識の欠片も傾けることなく少年の声は高く蕩ける。潤んだ瞳も湿った吐息も捧げる相手はただ一人。そう叫ばんばかりの従順ぶり。

「……あらまぁ。素直ね、上手ね。すごいわよ」

自ら命じたはずの飼い主は何故だか瞬きを数回挟み、細めの眉を緩ませた。それだけでもふにゃふにゃと笑い惚ける弱っちい男の子が、その上くしゃくしゃと頭を撫でて貰ったらどうなるか。

「おねえしゃぁん……♡」

自ら頭を擦り付け擦り寄せ、その身に朱を差し恍惚と浸る。夢見心地で心を煮溶かし、喉を詰まらせ溺れゆく。干乾びていた小さな胸が溢れてしまうに決まっている。

「もう、甘えんぼちゃんなんだから」

そう微笑んでみせる頬も仄かに紅く染まっていた。観客達が泡を吹こうが喚き散らそうが、甘えるなんぞと声を枯らして怒鳴ろうが、見つめ合う二人は身じろぎもしない。そもそも聞こえてすらいないのかもしれない。

うっとりと瞑っていた瞼が不意に見開かれる。少年の腰に震えが走り、そのまま背筋を駆け上がった。綿のような栗毛が揺れ動くさまにリーナは悪戯っぽく笑みを零した。

「あらあらまぁまぁ。したくなっちゃったの？」

はにかみ頷く言いなりオトコノコに顔を緩まされるのを彼女は密かに自覚する。あれだけしておいて尚照れることも、もじもじと内股になって頬を赤らめる姿も、にもかかわらず愛くるしい瞳が期待と安心、何より信頼で満たされていることも。何もかも全てが彼女の胸へと押し寄せて身体の芯を火照らせた。魔術があろうと魅了の力を持ち合わせようと、そういった部分は淫魔とて人間と大差ない。

「それじゃあおすわりしましょ。おめめはぎゅ〜ってしてね、こっちにお背中向けるのよ」

幼児でも相手にするような一文一文を区切った語りかけ。間延びした言い方も相まって言葉だけなら保母のようだが、身体中から匂い立つ色香と燻る情欲は誤魔化しようが無い。長い指を腰へと回して服から紐を抜き取ると、股間から臀部にかけてを覆っていた布地が前掛けのようにはらりと垂れた。

「おめめは開けちゃダメ、それだけはダメよ？」

繰り返す言い聞かせとはまるでそぐわぬ舌なめずり。言いつけをしっかりと守った少年には何が起きるかなどわからない。何故甲高い悲鳴が上がったのかも、お姉さんが笑いを零した理由も。とくとくと鼓動をはやらせながら全てを委ねて待つばかり。そんな彼の鼻先を湿ったぬくもりが包み込む。

「これ、なにかしら？　わかるかなぁ……？」

小さな鼻を鳴らしたかと思うとたちまち面持ちが蕩けていく。覆われていてもなお分かるほど口元がほころび溶け崩れていく。それこそ涎を垂らしそうな緩み具合だった。

いくらか熟れすぎた果実のような胸に沁み入る酸味と甘さ。撫でてくれる手のひらよりも一際熱い蒸れた薄布。息を吸うたび鼻腔を犯し腰をとろかす雌の味。

脱ぎたてパンティを味わってぞくつく少年を存分に眺め、リーナは滾る充足感を噛み締める。とっておきのセクシーな黒下着を気に食わない連中の眼前へと晒すのは本意では無かったが、夢中で匂いを堪能する彼を前にして悪い気はしない。

それに。

これから少年が万一瞼を開けてしまったとしても、その目に見えるものは被せられた布地だけ。羞恥と快感でかき乱された頭から言いつけが抜け落ちてしまっても瞳には何も映らない。向かい合う大広間にわらわらと集った人間たちは一人たりとも見えやしない。目を血走らせた父親も汚物を見るような顔をした高慢なフィアンセも、決して視界に入らない。入れさせやしない。

「そう、わかるのね、きもちいね。それじゃあだっこ、しちゃうからね♡」

蝙蝠のような翼が捻じ曲がり、何本もの巨大な黒腕へと形を変える。少年の脇を抱えて軽々と持ち上げ、しっかりと抱き寄せる人ならざる腕。無防備なうなじにかかる湿った吐息、背中に感じる胸の膨らみ。魔物の手中に収められた哀れな被食者であるはずなのに彼の嬌声は止まらない。内ももを抱え上げられ足をM字に広げられ、ぴょこりと小さな性器を衆目の前でつまびらかにされ、辱められる

惨めな弱者。嫌られるがままの無力な被虐者。家、血筋、名前、生まれながらに背負わされた立場。その一切を踏み躙る情け容赦ない辱め。

絡め取られた無様な肢体へとサキュバスは自らの手を伸ばす。薄毛どころか無毛の股間を魔性の指先が捕まえる。愛撫と言うには素っ気ない、焦らしも煽りも見当たらぬ手付き。だがそれは至極当然の事だろう。これは前戯でも愛撫でも無いのだから。

包茎性器に優しく触れる整った指先。親指と人差し指、中指でそっとつまみ上げられた先っぽは余り皮越しでも敏感なのか、少年の腰がじくじくと沸き立った。

「だいじょーぶ、いたくしないわ。へーきだからね」

耳元であやし囁きながらつまんだ指をゆるりと動かす。くりくり、ちゅくちゅくと粘着質な音が鳴る。先端のシワがじわじわと伸びて消えていき、同じだけの

皮が今度は根元に寄っていく。あうぅ、ひぃんと声を漏らすも少年はその身を委ねたまま。股を閉じようとすらしなかった。

「先っぽ、ぴかぴかのツヤツヤね。宝石みたい」

丹念に丁寧に剥き下ろされて露になったピンク色。恥ずかしがり屋の先っぽは竿と同じく細く小さい。カリ首の張り出しも足りなければ亀頭の尖りも弱々しく、色の薄さも相まって生殖器官とは呼べそうになかった。事実、今のこれは性器ではない。

「ちゃ～んと支えてるわ、ちんちん持っててあげるからね。大丈夫よ。お姉さんに任せて、ね？」

弱く短く粗末なそれは、男らしさなど欠片も無いそれは、ただの排泄器官に過ぎなかった。少年の喉がこくりと動く。

「はぁ〜い、どぉぞぉ。しーし、ちっち〜。おしっこち〜♡」

流し込まれた甘い声が心の堰を切り崩す。少年の腰がぞわりと波打ちひくんひくんと声が漏れる。情けないウインナーが僅かに膨らみ、黄金色の液体が宙に向かって放たれた。きらきらと弧を描いたかと思うと、すぐさまはしたない音を立て鳴らし飛沫と共に受け皿を汚した。

「ぜぇんぶちっちしちゃいましょうね。ふふっ、おててが熱いわ。こんなにいっぱいじょぼじょぼしちゃって……♡」

支えた右手に伝わる振動、みるみる弛緩する未熟な身体、垂れ流される意味を成さないとろあま鳴き声。抱き締め感じる少年の全てがシルクの肌に火を灯す。囁き伝える舌先をうずうずと熱が這い回る。それでも彼女は踏み止まり強く優しく抱擁する。迸る尿が弱まり途切れて尽きるまで、短小性器のおしっこお世話は

延々と続く。指に飛沫がかかろうと尿の臭いが鼻をつこうと嫌悪の欠片も窺えない。壊れ物でも扱うようにそっと静かにつまみ続けた。

解放感でへにゃれた竿を上下左右に振り揺らし、惨めにぷるぷる跳ねさせる。残った雫を振り飛ばす放尿の後始末までもを完璧にこなしてようやくリーナは子供ちんちんを手離した。

「ちゃんとできたわね、おまるにちーちーできたのね。すごいわ、かわいい。とってもえっちよ……♡」

いつの間にやら用意されていた容器は湯気の立つ尿でなみなみと満ち、どれだけ漏らしたのかが一目瞭然。少年の柔(やわ)い肌はどこもうっすらと染まり、下着を被らされたままにおねえさん、おねえしゃんと呼び縋る。呼ばれるたびに蕩けた目元はますます緩み、零れる息の湿り気は増していく一方だった。

「折角だし、最後に見せてあげない？　キスするところ」
息を火照らす少年を優しく優しく下ろしてやると、語りかける声が一段と熱気を孕んだ。どうとでも言いなりに出来そうな獲物へわざわざ問い掛ける意味など無さそうだが、必死に頷くさまを見下ろして女豹は背筋を昂らせた。
栗色の癖っ毛を梳いてやりながらさりげなく観衆に視線をやると、その大半は壊れかけの人形も同然。信じ難い痴態を前にして虚脱しきった様子である。
「ぁ、ぁぁ……いい子、だったの、に……。自慢のいい子、りっぱな跡継ぎ、だったのに……」

少年の母親は特に目も当てられぬ有様で、うわ言のように一人呟きを繰り返している。誰かに聞かせるわけでなし、何かを伝えることも無し。言葉通りの独り言、独りよがりの言葉を垂れ流すばかり。

無言ですっくと立ち上がると、リーナは少年の前へと立って正面から彼らに向き合った。まるで背後を庇うかのように。

「そろそろ弁えて頂けたかと思うけれど、どうかしら？　とっておきも見せてあげるから、心の底まで思い知ることね」

力無き視線をその身に集め、つまみ上げた布地を揺らして見せる。今しがたまで少年の顔へと被せられていた下着だった。しばらくぶりに解放されるも、雌性したたる豊満な尻と前掛けのように垂れた服で遮られて広間からでは少年の表情は窺えない。精々、ぺたりと座り込んでいるのが見てとれる程度だ。淫魔の魔手

から放たれた今、少年の身を縛るものは何一つ存在しない。しかし……いたいけな身体は逃げも怯えもしないままただただ座っているだけだった。

勝ち誇った笑みもあらわに下着を手放しはらはらと落とす。打ちひしがれた人間たちを前にしながら嗜虐心を隠さない人外の存在。見ていることしか出来ない観衆にとってまさしく悪魔そのものだろう。だが、どうやら彼女はなおも手を緩めるつもりが無いようであり。

「あらぁ？　そんなに嗅いじゃって。はしたないのね」

口角を吊り上げ尖った犬歯をちらつかせ、捕食者の顔を覗かせる。甘く嫩った相手は観客では無かった。姿も声も克明に映し出す彼女の魔術と言えど、匂いまでもは届けられない。届けるつもりも無いだろう。だが今、たった一人それを味

わえる者がいる。目の前に広がる桃源郷を胸一杯に吸い込んで酔いに浸れる者がいる。それも己の意思に基づいて。

真紅の瞳を爛々と光らせ、リーナは両手を膝についてみせた。折り曲げられた腰は当然後ろへ突き出され、少年の頭の数倍はあろう立派な雌尻がぷるりと揺れる。

「ふわぁぁ……♡」

煮蕩けのぼせた甘い声。惨めな無様な甘え声。少年の胸板に涎が一筋垂れ落ちる。ゆるりと笑みが漏れ、肉感的な女体が微かにぞわついた。

内股気味になった太ももの間で垂れ落ちた布が窮屈げにゆらめく。下着を被せる前、背中の紐を解く前までは股間から尻にかけてを包んでいた艶めく黒地。絨毯には相変わらず放られたままのくしゃついたパンティ。

「うそ、うそ……でしょう……？　おねがい、まって……いい子にもどってぇ……」

母親が蚊の鳴くような声を上げる。弾かれたように周囲もざわめき顔を強張らせるも今更どうにもなりはしない。漆黒のヴェールに遮られた少年は見向きもしない。耳障りな声が仮に鼓膜を揺すろうと、最早彼には届かない。

「しっかり深くよ。どう、出来る？」

少年を肩越しに伺い念を押し、リーナは自慢の桃を両手で鷲掴む。例え直接見えずとも、尻肉を割り拡げた奥に何があるのかなど誰の目にも明らかで。音にならない悲鳴が上がる。

こくりと小さく、噛み締めるような少年の頷き。リーナの喉が大きく鳴った。

「あとは、とびっきりいやらしく……ね？」

息を飲む音。舌なめずり。一瞬の静寂が訪れる。そして。

ぷぢゅゅゅぅぅぅ〜〜〜っ！　じゅぞっ、くちゅっ、にちゅぅっ！　じゅぶぅぅぅっ！

「あぁんっ♡」

滑らかなうなじが震えたち、翼がぞくぞくと形を歪ます。背筋はピンと反り返り頬は色付き果物のよう。焦点を失った紅い瞳が艶めかしく潤んだ。

じゅるじゅる、ちゅぷぢゅぶ。いやらしい水音ばかりが響く。少年の頼りない両手はむちむちの腰を必死に掴み、離れるまいと叫ぶよう。埋めた顔で肉がたゆつき尻の丸みがわずかに崩れる。

「ふふっ、あは……んんっ♡　すごいわ、嬉しい。とっても上手よぉ……♡」

その声色は色っぽく湿る。乱れながらも上品な声と下品なキス音が絡み合う。うっとりと顔をほころばせ、淫魔はとびきり甘く言葉を紡いだ。

「お尻にちゅっちゅ、できたわね♡　んくぅっ♡」

熱の籠った幼い舌先。肛門を必死についばむ小さな唇。捧げられる誓いの口付け、初めて味わう妖しい喜悦。彼女にとっても格別だった。とてもとても、特別だった。

「いい子だったのに、あんなにいい子だったのに……」

地獄のような大広間。蹲（うずくま）りすすり泣き、あるいは放心してぶつぶつと嘆く惨めな者たち。

「我が家の血が、名が……なんという……」

顔面蒼白の好例と言っても過言ではない様相。もはや何も見えていないであろう彼らをリーナは冷ややかに見下ろした。何も映さぬ空っぽの瞳をそれでも鋭く刺し貫いた。

「どう？　あなたたちの声よりも、ずっとずっと私とのキスが大切ですって。きちんとわかってもらえたかしら？」

反応など返ってくるはずもない。それも承知の上だった。縋り寄る少年の手に自らのそれを優しく重ね、悪魔の如く彼女は嗤う。

「それじゃさようなら。同じことを繰り返さないよう、精々考えてみることね」

ぶつんと呆気なく、跡形もなく、浮かんでいた光景はかき消えた。悪夢か何かと錯覚するほど綺麗さっぱり消え失せた。痕跡すらも残っていない。

だがしかし、確かなことが一つだけ。攫われた少年が帰ってくることは二度と無かった。捜すことすらしなかった以上、見つかるはずも無かったのだが。

## 小さな世界で

ぴちゃぴちゃ、ちゅぱちゅぱと水音が響く。二人きりの部屋にそれだけが響く。ぺたんと愛らしいあひる座り。高揚を保った若い柔肌。お姉さんの腰に両手を回し、少年は小さな顔を肉感的なお尻へとすっかり埋めきっていた。魅惑の窄まりに口付け、舐め上げ、吸い付き、幼い舌で秘められた門をたどたどしくこねる。初めての舌遣いは見るからに拙く、幾筋もの唾が口元から垂れ落ちてしまっていた。

キスに耽るいたいけな彼をリーナはちらりと窺った。いつの間にやら面持ちがほどけ、先程までは恐れすら感じさせた鋭い目元が穏やかな垂れ目に様変わりしている。時折身体を震わせながら誓いのキスを受け止め噛み締め、返す眼差しは

ひどく優しい。歳の離れた弟か、あるいは我が子を愛でるようなぬくもりに満ちた顔つきだった。

「もう終わったわ。いいのよ？　無理にしなくて……あんっ♡」

気遣いへの返事は抱擁だった。ひ弱な細腕に精一杯の力を籠めて豊かな丸みに抱き縋り、いっそう深く接吻を交わす。鼻が潰れようと息が詰まろうと気にも留めない甘えぶり。お姉さんにしがみついた両腕はどんな言葉よりも雄弁だった。

「もう……かわいいんだから……♡」

仕方なさげを装いながらも抑えられずに溢れた喜色。隠しようもない明るい笑顔。吐息が艶を増し、ルビーの瞳が輝きを帯びる。健気にすりつく小さな手に自らのそれを優しく重ね、リーナは静かに両翼を広げた。見る間に形を変えた翼で

儚い身体を包み込む。剥き出しの肩を覆って背中をさすり、ゆっくりと髪を撫でつける。少年の目元が熱く潤んだ。

「ありがとう。温かいわ、気持ちいいわ。お姉さん、とっても嬉しい」

頬を雫が伝い落ち、触れ合う美尻を僅かに濡らした。互いの言葉は自然と途切れ、二人っきりの世界の中で誓いのキスはしばらく続いた。

「よく思いついたわね、あんな方法。びっくりしちゃったわ」

一人で使うには持て余しそうな広めのベッド。だが、オトナな女性と小柄な子供が寄り添いあって寝転がるには丁度良い大きさだった。

「キスするところを見せちゃおう、だなんて。凄いのね」

リーナはしきりに感心しながら幼い身体を抱き寄せる。控えめながらも美しい胸が押し潰されて形を変えた。しかし、褒められているにも関わらず少年の瞳からは曇りが晴れない。

「ありがとう……ございます。でも、婆やに酷いことしちゃった……」

「きっとわかってくれるわ、あのお婆ちゃんでしょ？　あの人はちゃんと見ていたもの」

大広間に集った人間の中でただ一人、少年の身を案じて呼びかけた老婆。その祈るような視線や安堵の吐息は彼女の脳裏にもはっきりと残っていた。

「なんなら、後でお婆ちゃんの夢にお邪魔しましょう？　ちょっとだけなら一緒に連れて行ってあげられるから。きちんとお話してあげて？」

そっと背中を叩き、穏やかな声で語りかける。それでもなお憂いを拭えぬ少年をじっと見つめ、リーナは静かに言葉を待った。

「ありがとう……ございます」

目を伏せたままの、おまけに迷いも残ったか細い言葉。されど返事には違いない。触り心地の良い癖っ毛を優しく撫でる。自分の髪には無いふわふわとした感触がリーナにはたまらなく心地よかった。

「いいのいいの。他の人は追ってきそうに無いし、大成功じゃないかしら？」

声が弾んだ。自覚できるほどに。夢にお邪魔したら、あのお婆ちゃんにだけはきちんとご挨拶をしようかしら。そんな妄想までもが浮かれた頭に広がった。思わず笑みが漏れそうになる。

「はい、大丈夫。絶対、絶対大丈夫ですよ」

緩みかけた頬が固まった。きっぱりと言い切る声は乾いていて、どこか虚ろな響きがあった。

「あの人たちが欲しいのは、必要なのは……いい子だけだから」

少年の言葉がやせ細る。小さな身体を怖気が覆う。頼りない手が、お姉さんに触れ縋る指が弱々しく握られる。紅い瞳が揺らめいて整った眉がくしゃりと歪んだ。

「……都合のいい子、だけだから」

ぽつりと溢れた一言。深く俯き吐きこぼした事実。元々小柄な少年が今は一層小さく見えた。己の迂闊さにほぞを噛む。

「ごめんなさい、ごめんなさい……こんなこと……。せっかく上手くいったのに」

狭い未熟な胸の中、干乾びていた心の奥底。触れ合ってくれる体温に溶かされ、吐き出した本音に導かれ、次から次へと湧き上がる。抱え込んでいたものが抑えられずに迸る。しかし、なのに。

「それに、あんな嫌な役、お願いして……ムリなこと言って……ごめんなさい」

嗚咽を漏らして悶える少年が真っ先に発したのは身を切るような謝罪だった。引き絞るようなごめんなさいに真紅の眼が見開かれる。

「お姉さんにばっかり、ごめんなさい……我儘言って、ごめんなさい……」

彼はまだまだ子供も子供、歯が生え変わる最中といった年頃だ。そんな年齢の男児ならば大抵は元気過ぎて腕白で、多少我儘が過ぎることも珍しくない。まだまだ甘え癖が残っている時期でもあるだろう。それなのに。

「お姉さん、ごめんなさい……」

何も答えず口を結び、リーナは縮こまった少年を強く抱き締め包み込んだ。こうしていれば歪んでしまった顔を見られずに済む。悲しげな声が口をついて余計に彼を追い詰めることもない。抉られるような痛みに耐えて愛しい幼子に肌身を寄せる。否応なく伝わる狂ったような鼓動が身体の芯を苛むがそれでも抱き寄せ離さない。離したくなかった、離れたくなかった。

「あのね、お姉さんね……お姉さんはね、嬉しかったの」

吹雪の中を手探るように、灯りの無い地下室で目を凝らすように、深く沈んで探り求めおぼろげながらも掴んだ輪郭。やっとのことで見つけ出した言葉は酷く拙く素朴だった。肩を跳ねさせる少年をその身で受け止め抱き包む。ためらいがちに慎重に優しい魔物は心を紡ぐ。

「とってもとっても嬉しかったの。ホントよ?」

背筋に添って撫で下ろす。頭をさする。唇に触れる毛先を感じ、そっと静かに囁きかける。

「一緒にいたいって言ってくれて。追われないようにって考えてくれて。頼ってくれて、甘えてくれて」

少年の喉が震えた。憂いを帯びた目がじわりじわりと見開かれる。

「こうしてぎゅーってしてくれて。いろいろお話してくれて。お姉さんのこと、気遣ってくれて」

はち切れそうな太ももが、細く締まったふくらはぎが少年の素足に寄り添った。誘い堕として踏み躙るべく淫魔に備わる完璧な美脚。それがどこかぎこちなく、おずおずと動いて絡みつく。

「うれしいの。嬉しくて嬉しくてね、とろけちゃいそうなの」

凍てついていた手足が緩んだ。怯え強張り固まっていた身体がぬくもりに包まれる。肌を覆い血肉を温め、奥へ奥へと染み入っていく。水底で震える小さなものが抱かれ撫ぜられ溶けていく。

「おねだりしてくれて、ワガママ……ってほどでもないけど言ってくれて。幸せなのよ」

一つ息をつき、リーナは抱き締めていた頭をそっと離した。頬を包んで視線を合わせる。儚げな顔を覗き込む。青い瞳は潤んでいた。熱い雫で濡れていた。

「ありがとう……♡」

つぅ、と一筋真珠が伝う。再び胸元に抱き寄せて滑らかな頬へと唇を寄せた。高鳴る心臓が感じ取れる。今度は綺麗な音がした。

「それにね？　お姉さん、結構楽しかったのよ」

可愛らしい彼をついばむように囁く。澄んだ声色でこめかみを撫ぜる。息が毛先を微かに揺らした。

「やらしいことするのも、見せつけるのも。お股がゾクゾクって、きゅんきゅんってしちゃった……せいせいもしたしね」

強く抱かれて触れ合う場所では血潮のざわめきが増していく。熱い息にくすぐられると燃えるように柔肌が色づく。

「だからね……教えてほしいな。したいこと」

心がほどけて安堵に浸る。痛みが消えゆき火照りへ変わる。そうしていけば思い出す。抱き締めてくれる柔らかさを。守ってもらえる幸せを。隙間なく触れ合うむちむちの女体、ミルクのようにまろやかな香り。濃厚に立ち込める雌の匂い。解き放たれた敏感なカラダが抗えるわけもなく、抗いたいはずもなく。息を飲み

込み言葉を探し、少年はおずおずと顔を上げた。初心（うぶ）な様子に生唾を飲むもリーナもじっと視線を返す。二人はしばし見つめ合った。

「ぼく、その……おちんちん、えっと、あの……」

「うん、むずむずしてるわ。ぴくぴく、ぷるぷる～ってしてるわね」

満面の笑み。ありありと伝わる悦びと昂り。待ち望むあまりに弾んだ声。少年の奥底に根雪のように積もっていた躊躇が音を立てて崩れ落ちた。もじもじと足を擦り合わせる。はにかみ笑いが咲き誇る。

「おねえさん、イキたい……っ♡」

紅い瞳が煌々と燃えた。火柱を上げて轟々と、焚き火のように温く柔らかく。

噛み締めて、味わって、彼女はゆっくりと頷いた。

「……ありがとう、ありがとね。しましょうか♡」

「ひぅ……んんっ！　あ、あぁ……あぁっ！」

透き通るような甘いさえずり。声変わり前の嬌声が淫らな水音と絡み合う。押し倒されて女体の下で悶える少年は、一見すると襲われているかのようだった。

「ん、ちゅ……ぱっ、んぅぅ……かわいいわ、ビンカンね……んっ♡」

ぴくぴくと跳ねる華奢なカラダにキスの雨が降り注ぐ。唇に、頬に、鼻に、額に。顔を埋め尽くさんばかりに口付ける。そっと啄み、唇を這わせ、舌先を軽く伝わせる。覆い被さり身を擦り合わせて片手はぎゅっと恋人繋ぎ。もう片方で愛おしそうに頭を撫でる。そっと背中に手を回す。親子と見紛う体格差。少年の幼い肢体は肉感的な女体にすっかり覆われ、ただ弱々しくときめいていた。

すべすべと心地良い子供の柔肌。弾力に満ちて赤く火照った淫魔のもち肌。愛しい相手の感触が互いの熱を高め合う。短小包茎子供性器がぴくん、とくんと惨めに脈打つ。お姉さんの柔らかお腹に抱かれ潰され甘え泣く。

「んぅ……ふふふっ、あついわね。ちいちゃいちんちん、えっちよ……♡」

淫気の籠った囁きはただそれだけで愛撫になり得る。まして、お姉さんに出逢うまでは自慰すら知らなかった初物相手ならば尚のこと。感じやすい肌は面白いほど簡単に粟立ちぞくつき炎を宿す。澄んだ瞳がうっとりと蕩ける。まっさらな視線を受け止めてリーナは思わず唇を舐めた。

「かわいいわ……よわぁいちんちん、めろめろのおかお、すっごくかわいい……♡」

刷り込むように繰り返す。指を絡め、まっすぐ見つめ、飾らぬ言葉を繰り返す。少年の目元がまた滲む。

「おねえさぁん……すきぃ……♡」

白磁のような肩に痙攣が走った。プラチナブロンドの長髪が大きく揺らめき輝いた。どくん、どくんと心が鳴った。

「あひぃっ！　ひっ、あぁぁ、あ……っ♡」

絞り出された喘ぎ声。勢い余った抱擁で小さな胸が押し潰されて肺から空気が溢れ出す。苦し気に反り返ってひくひくと舌を震わすも、彼の横顔は惚けて見えた。息も出来ない苦しさの中で眉を垂らして頬をふやかす。抱かれ愛され恍惚と浸る。

「すき、すきよ……おねえさんもね、すきぃ……だいすき、たべちゃいたいくらい……っ♡」

少年の頬の奥、耳の下、細い首と顔の境目。感じやすい弱点をとびきり甘い囁きが襲った。濡れそぼった息で舐められ嫩られ頭の芯まで痺れが走る。手足の力が萎えて消えゆく。息をするのがやっとの身体で抵抗出来るはずが無い。オトナの身体でのしかかられてその身をよじれるわけもない。お姉さんに襲って貰える。食べてもらえる。彼が拒むはずもなく。

「あっ、あ、あぁぁ……っ♡」

かぶりつかれた急所がわななく。声にならない空っぽの嬌声。肺が震えて涙が湧いて無力に惨めにのたうち回る。精一杯のひくつきも当然のように押さえ込まれて何ら意味を成さなかった。鋭い犬歯は決して当てず、歯型も残さぬ手加減甘

噛み。沸き立った吐息が首筋を犯す。指より器用にうねる舌が薄い皮膚をねっとり舐める。鳥肌の一つ一つを味わうように這いずり吸い付きしゃぶり食む。焦点を失った青い瞳がびくり、びくりと揺らめいた。

「ん、んんぅ……おいひいわぁ……♡」

咥え込んで離さないままリーナは声を艶めかせた。じゅるじゅると音を立てて脈打つ首を舐め下ろし、麗しい指を胸板に。尖り勃った薄桃色の膨らみへと迷うことなく滑らせる。可愛らしく自己主張を続けているのは見ずともわかりきったこと。キスの雨を降らす中、美乳に埋もれてときめく突起をはっきりと感じ取っていたのだから。軽い愛撫をしてやるだけで、愛されたがりな子供乳首がすぐさま切なくなることを彼女は知っていたのだから。

「ぁひっ！　ひん、ひぃん、やらぁ……りゃめぇっ♡」

必死の喘ぎがきゅんと高まる。奏でる音が色気を増した。爪を立てず、つまみもせず、指の腹で撫でさするだけ。乳輪に添って撫で回すだけ。とびきり優しくただただ愛する。丁寧極まる指技とは逆に口の動きは激しさを増した。啜りたて、息を吹きかけ、こそげ落とすように舌を這わせる。じゅぶじゅぶ、じゅるじゅると品の無い水音が頭の傍で鳴り響く。だめぇ、りゃめぇと慈悲を乞われても淫魔の愛は止まらない。自らみっともなく開いたか弱い股、お姉さんに抱き縋る両足、ぎゅ、ぎゅっと絶えず握られる繋いだままの小さな手。粗末ながらも精一杯に大きくなって彼女にすりつく子供ちんちん。強靭なはずのサキュバスの胸が早鐘のように鳴り響く。骨の髄まで熱気が広がる。自慢の尻には汗が滲み、太ももの付け根がぴりぴりと痺れた。雌の証が密かに蠢く。

「ふふ、すごぉい……めろめろの、とろっとろね……♡」

心ゆくまで悶える彼を貪り尽くし、リーナは上がった息を整えた。少年の口はだらしなく開いて息も絶え絶えといった有様。にもかかわらずおねえさん、とふにゃける姿が腰を煮立てて昂らす。包茎短小ちんちんは恥ずかし汁をだだ漏らし。舌足らずな甘え声は蕩けて媚びて発情済み。準備は既に完璧だった。彼のみならず二人とも。

「それじゃ……いくわよ♡」

天国へ、極楽へ、捕らえて離さぬ底無しの快楽へ。舌なめずりを一つ挟んでリーナはその身をゆるりと起こす。瞳を光らせ妖艶な肢体を見せつけて魔物の顔を覗かせる。びくつく股間に跨ったその時、たおやかな右手が彼女を掴んだ。

「あの、ぼくは……どうすればいいですか？　どうしたら……」

くりくりとした目は潤んでとろけ、頬は可愛らしく染まっている。鼓動がこれ以上無いほど高鳴っているのも手に取るように明らかだ。けれども少年はじっと見つめた。お姉さんを真っ直ぐ見つめた。

「よろこんで、もらえますか……？」

それなりに永く生きてきた。己が力で望むがままを叶えてきた。そう自負する彼女だったが……胸が詰まるという感覚はこれが初めてだったのかもしれない。

「もう、ホントにもう……っ♡」

こらえきれずに顔がほころぶ。妖しさを煮詰めた魔性の笑み、人を惑わす淫魔の刃。それが年端もいかない少年のたった一言で崩れ去る。どうしようもなく面映ゆくてむず痒くて、詰まった胸が熱く疼いた。

「いいの、いいのよ。なんにもしなくていいわ。お姉さんがしたいの、お姉さんにさせて？　ね？」

愛しい唇を指先でなぞり、そっと押さえて微笑みかけた。今度はお姉さんの顔をして。

「ちんちんきもちいいのだけ感じてて？　お股がへにゃけちゃったら、そのままとぷとぷ～ってイっていいわ。おもらしみたいにちっちして♡」

囁きは蜜のように色濃く甘い。頬を包む手のひらは期待と悦びに燃えている。十二分に伝わってもなお、甘え慣れない少年は踏み出し切れずに言い淀んだ。

「それじゃ……そうね、ひとつだけお願い。お顔、見せてほしいな」

おかお？　とそっくりそのまま聞き返され、にまりと悪戯っ気が顔を出す。無論その何倍もの喜びを伴って。

「とろっとろでふにゃんふにゃんの、えっちでえっちでカワイイお顔。お姉さんに見せてほしいの。お姉さんだけに独り占めさせて？」

素直な性器がぴくんと跳ねる。女々しい腰が震えたつ。おずおずと頷く少年にリーナは優しく笑みを返した。

「ありがと……♡」

唇が迫る。熱気と吐息が鼻をくすぐる。頬への軽い口付けに少年はうっとりと目を瞑った。目を瞑ってしまった。

つぷ……と響いた濡れた音。凍えた指先を暖炉にかざした時のような痺れを伴う強烈な熱。あれよりもなお熱い、体液が煮え滾るように熱い。なのに辛くない。痛くない。少年の腰が燃え盛る。

柔らかい重さ。次に感じたのはそれだった。腰、太もも、鼠径部。身体の要にのしかかる。触れ合う部分はむにむにと優しく、その奥からはずっしりとした重みが感じられた。知っている感覚。お姉さんの心地良い重さ。大好きな感触。安堵し緩んだ心のままに息を漏らした次の瞬間。

「ひっ、ひぃぅぅっ！　あひゃっ、ヒっ、ひぁぁぁぁっ！」

突き上げるような痙攣。顎が外れそうな絶叫。ガクガクと震える。身体中が弾け散る。そう思いかねない衝撃が彼を襲った。

煮蕩け盛ったサキュバスの膣。彼女にとっても大切な、とてもとても大切なところ。小さな小さな子供ちんちんを一気に奥まで飲み込んでふわりと優しく抱き締める。出来上がった雌肉が余り皮を剥き下ろしカリ首の裏までぴっちり寄り添

う。奥へ奥へとヒダが波打つ。股間を濡らして余りある蜜がシーツに次々滴り落ちた。

「あぅぅ、あつぅい……♡　すっごいかお、しちゃってぇ……♡」

リーナの言葉には酔いこそ回っていたものの確かな余裕が残っていた。彼女にすればただ挿れただけ。繋がって、一つになって、悶える性器を愛でただけのこと。それでも自慰すらまともに知らなかった芽吹いたばかりの若々しい茎にはあまりに強烈だった。張り詰めた竿を抱きしゃぶって貫える悦び。愛おしい相手に抱かれる幸せ。心の底から嬉しそうなお姉さんの声。快楽の渦に飲まれ、切に願っていた幸福に溺れて意識が揺らぐ。遠のきかける。みっともなく開いた股をひくつかせ、少年はその身を強張らせた。縋るように手を握る。必死になってお

姉さんの手を握る。同じ強さで握り返され嬉し涙がぽろりと零れた。荒い呼吸を繰り返すたびに薄い胸板が上下する。桜色の勃起乳首が汗で艶めき淫らに匂った。

「あらぁ……？　ちっち、ガマンしちゃったの？」

少年の顔を覗き込み、リーナは汗ばむ額をそっと撫でた。紅潮した感じ顔は愛くるしい色香を放って止まない。独り占め。自らの言葉が脳裏をよぎり彼女の膣奥（おく）がじんと疼いた。

「ごめんなさい、あの、ぼく……ぼくぅ……」

ぜいぜいと肩で息をし、少年は辛うじて声を絞り出した。いいのよ、ゆっくりね。とお姉さんは待ってくれるけれど。穏やかにさすってくれるけれど。だから言葉を振り絞る。

「うれひくて、きもひ、よくって……それに……」

襲ってくれた時の声。見つめてくれる甘い笑み。涙するほど嬉しくて、何かせずにはいられなかった。

「おねえしゃんが、ひあわせひょうだから……もっと、ずっと……ずぅっと……♡」

にっこりと浮かべた無垢な笑顔。お姉さんを見つめる純朴な涙目。呂律の回らぬとろけ声。真正面から受け止めたリーナは真紅の瞳を丸くした。端正な小口がぽかんと開いた。

「もう、もう……もうっ♡」

かぶりつくような抱擁。覆い被さり抱きすくめ小さな彼を包み込む。強く強くその身を寄せる。囁きはただそれだけでも極上の愛撫になり得る。彼女はその身をもって実感した。心の底まで思い知らされた。

「ありがと、ありがとう……！　嬉しいわ、お姉さん嬉しい……おかしくなっちゃいそう……♡」

決して大袈裟な言葉では無かった。少年を跨いだ両ももは細っこい彼を強く締め付け、挟み込んで離そうとしない。膣はうごめき猛り狂って頼りない茎を舐めしゃぶる。粘度を増した愛液がへそ近くまで漏れ広がる。丹精込めた誓いのキスでてらてらと光る菊門は性器のようにヒクヒクと収縮を繰り返していた。

「いてくれるのがね、嬉しいのよ……一緒にいるの、幸せなの……すき、すきぃ、だぁいすき……♡」

子供のような言い回し。捻りも無ければ洒落っ気も無し。愚直な言葉が精一杯。互いの顔しか見えない距離で溢れる心をただただ囁く。

「おねぇひゃん、おねえしゃ……あぁぁっ！　しゅきぃ、らいしゅ……ぃぃぃっ♡」

手を握り返そうとした、想いを伝え返そうとした。けれども手足がちりちりと痺れて爆ぜる。舌が固まり動いてくれない。オスになり切れてすらいない未熟な身体が悦びの波にずぶずぶと沈む。水面に出ようと足掻く少年を柔らかなキスが押し戻した。溺れていてねと言わんばかりに唇を塞ぐ甘いキス。

「んちゅっ、ふふっ、かわいい……かぁわいい♡」

緩み切った口の端から涎が垂れ落ちる。すっかり蕩けたお姉さんに少年は言葉を失った。甘く火照った大好きな人はこの世の何よりも綺麗だった。

「あんあんって声聞いてるとね、お姉さんもジュクジュクしちゃうの……♡　感じてくれるの、嬉しいの……♡」

喉を鳴らしてリーナは迫る。目と鼻の先、二人の鼻が触れ合う近さ。整った睫毛の一本一本が見てとれる。愛しいひとがそこにいた。

「だぁいすき……♡」

囁きとキスはほぼ同時だった。唇が触れ合う。無防備な口に舌が割り入る。気付いた時には手遅れだった。

ぬるり、と犯される。煮えたつ肉が口腔を襲う。舌に絡む。締め上げられる。前歯をなぞる。奥歯を撫でる。頬を抉る。歯茎を舐る。敏感な舌の裏側も、物が触れることのない喉奥にすらも。リーナの舌は器用にうねって熱い唾液をすり込んだ。少年の唾を啜り上げては音を立てて飲み干した。びくん、と腰が跳ねた。細っこい腰が跳ね狂った。

だが。悲鳴のような反射だろうとのしかかる身体はびくともしない。全身を擦り合わせる密着騎乗位。濡れそぼった陰毛も程よい肉付きも押し付けられて離れない。たおやかな身体の奥に潜んだ人間ならざる力強さが彼の震えを抑え込む。ぐりぐりと腰を押し込まれ、女体とベッドに挟み潰され、滲んだ汗が混ざり合う。ひとつに溶け合い犯される。幼いカラダに骨の髄まで刻み込まれるお姉さんとの本気交尾。包まれ愛され貪りヌかれる徹底的な搾精セックス。しゃぶり尽くされ愛され倒す、夢見心地な幸せのるつぼ。ただでさえ弱い子供ちんちんに耐えられるはずが無かった。しかし。

ひくん、と睾丸が脈を打つ。背筋を妖しい痺れが這い登る。限界を超えたよわちんちんに甘いぬるさが広がった。腰の奥から迸る熱をそのまま膣に解き放つ……はずだった。

「あ、あぇぇ……ひぃん……♡」

とぷっ、とろぉ……とく、とくぅ……。情けない音。恥ずかしいぞくつき。敏感亀頭が泣きじゃくる。昂り盛った淫魔の膣は極上の締め付けを誇る逸品。徹底的に精を搾るべくその膣圧は並外れている。ごくごく稀なことではあるが、劣った弱い男性器では……締まりに負けてきちんと射精が出来ないほどに。溜まりに溜まった甘えた汁をちっちもぴゅっぴゅも出来なくて、おもらしするしか無いほどに。

そして。あまりに惨めな可愛い吐精をお姉さんは逃さない。

「はぁ〜い、ちっち♡　しーし〜♡　おもらしちんちんぴゅっぴゅのち〜♡」

膣を緩めてナカをうねらせ舐め回す。鼓膜に愛を注ぎ込む。愛する彼の手を握る。

「あっ、ひぃぅっ♡　あっ、あぁ、あぁぁぁ……♡♡♡」

どぷっ、とくん、とろぉ……とぷっ。弱々しい脈動。みっともない喘ぎ。射精と呼ぶには弱すぎて吐精と言うにはいささか強い。お姉さんにお世話されての子供ちんちんあまとろイキ。甘やかされてのふわふわ絶頂。

「んぅ、美味しっ♡　いっぱいいっぱいちっちしてぇ……♡　んじゅぅ……♡」

精を啜って舌鼓を打ち、再びリーナは唇を奪う。舐めしゃぶり、からめ取り、悶える舌を甘やかす。漏れ出すイキ声を受け止めて代わりに唾液を流し込む。上も下も犯して嫐り彼の全てを抱き締めた。

汁が合わさり愛液が匂い、涎も涙も混ざり合う。二人の熱がとろけて交わる。心の奥まで一つに繋がる。搾った精は勿論のこと、声も仕草も肌も瞳も、心すらも味わい尽くす。初めて味わう繋がる喜び。ひとつになれる幸せだった。

お姉さんに襲ってもらえる。お姉さんに求めて貰える。お姉さんに甘えんぼしてじんわり広がる絶頂の波。はずかしイキの夢心地。少年を満たす天にも昇りそうな快感は、お姉さんに包まれたままだと何処にも逃げていかなかった。何度も何度も身体に響き、鼓動と共に全身を巡り、ずっと濃いまま甘いまま。精も涙も溢れて止まらずお姉さんにただ縋る。淫らに蕩けて心を委ねる。

繋がり、甘え、甘やかし、二人でたただ寄り添いあう。互いの呼吸に聞き惚れる。味わう最中は永遠のよう、けれどもいつしか収まっていく。とぷとぷと漏れる精液も、流し続けた嬉し涙も、絡め続けた舌の動きも。ゆっくりと緩み、静まり、収まっていった。余韻を堪能するうちに身体の火照りも冷めていき、胸の高鳴りも静まっていった。ただ、溢れんばかりに満ち足りた心は少しも目減りはしなかった。

ゆるやかな動きで唇を離すと、繋がり続けた二人の間に幾つもの銀糸が後を引いた。息を整え見つめ合い、リーナはそっと笑ってみせる。

「こっちのキスも……しあわせでしょう……♡」

辛うじて、弱々しく。けれど確かに少年は頷く。瞳の曇りは跡形も無く、青空のように晴れやかだった。

ごつんと肘がバスタブに当たり熱めのお湯が顔へと跳ねた。慌てて少年の目元を拭い、目を伏せ気味にリーナは笑った。

「あはは……狭いわよね、ゴメンね」

陶器製のバスタブは一人用。彼と向かい合って膝に乗せ、身を寄せ合えばどうにかこうにか一緒に入れなくもない……といった大きさだった。

明らかに窮屈な湯船の中で少年は勢いよく首を振る。お姉さんを見つめる眼差しに不満の色は欠片も無い。

「一緒のお風呂、すっごく嬉しいです！　さみしくなくって、一人じゃなくて……」

無垢な声が浴室に響く。眩しい笑顔に見惚れたのだろうか、返す言葉がしばし詰まった。

「……ありがとう。嬉しいわ」

眉を垂らして頬を撫ぜる。細いあごを指先でなぞる。滑らかな喉を静かにさする。宝物を愛でるような手付きに少年はふにゃふにゃと瞼を閉じた。あやされるがままにその身を委ねた。

湯気が漂う。水面が揺蕩(たゆた)う。時折滴る雫の音。二人ぼっちの小さな世界。

「あのね」

「あのっ」

示し合わせたかのように互いの声が重なった。片や笑って片や慌て、当然のように少年が譲る。

「あのね、もっとぎゅ〜ってしても……いいかしら？」

幼い顔が明るく染まった。答える前に身体が動きお姉さんへとぴったり寄り添う。

「はいっ！　うれしいです……うれしい……っ♡」
背中に腕を、腰に両足をぎゅっと回してすがりつく。心臓の音が響き合いどくん、どくんと音がした。
「あまえんぼだっこ、赤ちゃんみたいね。かわいいわ」
子供赤子を両手でぎゅっと抱き締め返す。守るかのように少年を包む。囁き声は穏やかだった。
「おねえさん……」
「なぁに？　なんでもいって？」
そっと耳打ち肩をさする。急かすことなく言葉を待つ。
「ぼく……おねえさんと一緒が……嬉しいんです」
微かな声は熱かった。涙の滲む声だった。

「ぼく、ずっと。ずっと、ずぅっと……おねえさんの……傍に……」

少年の肩が強張った。かすれた言葉は祈るよう。強く抱き締め解き放ち、濡れた瞳と視線を合わせる。切なく潤んだ愛しい彼にリーナはとびきりの笑顔を贈った。特別な、大切な、彼だけに捧げる贈り物。

「もちろんよ。ずっとずーっと、いつまでだって一緒にいましょう♡」

誓いの言葉は甘く響いた。二人っきりの小さな世界に深く、深く響き渡った。